

入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「できることに目を向けて」

愛知県・名古屋大学教育学部附属高等学校2年 園田美月姫

私には、七つ年の離れた弟がいます。その弟は、生まれてから二歳になるまで、ほとんど言葉を話しませんでした。そのことから母は発達障害をもっているのではないかと疑い、弟は頻繁に病院に通うようになりました。当時小学三年生だった私には詳しいことは分かりませんでした。父や母が真剣な顔で何かを話している姿を見て、自分の弟には何かあるんじゃないかと感じることもありました。

母から、弟に発達障害があるかもしれないと言われたのは、その数か月後のことでした。まだ幼かった私には、それがどんなことを意味するのかを理解することはできませんでしたが、ぼんやりと私の弟は普通の人とは違うということだけは分かりました。

それから私は、発達障害とはどういうものなのか、自分なりに調べてみることにしました。小学校の特別支援学級をのぞいてみたり、発達障害をもつ人が題材になっている本を読んだりして調べれば調べるほど、もしかすると自分は弟と一生言葉を交わせないのかもしれない、他の普通の兄弟みたいに一緒に遊ぶことができないかもしれない、と良くない想像ばかりしてしまい、その度に悲しくなりました。

そんなある日、私の転機となる出会いがありました。それは、町内の福祉センターで働く、障害をもつ人達との出会いです。その人達は毎日同じ時間のバスを使って通勤していて、たまたま私がそのバスに乗り合わせたことで出会いました。

私が驚いたのは、その人達の社交性と温かさです。その人達は、初めて会った私にも明るく挨拶をして、その後も優しく話し掛けてくれました。障害をもつ人同士もとても仲が良く、楽しそうに話をしてくれて、その周りにいる健常者の人達も、それを嫌な顔一つせずに温かく見守っていました。

私は、そんなバスの明るい雰囲気を見て、弟が障害児かもしれないというだけで落ちこんでいた自分に対して情けない気持ちになりました。確かに、障害をもつ人は健常者と比べてできないことが多いかもしれませんが、人々を思いやったり、大切にしたりする力は、健常者よりも障害者の人達の方が優れているのではないかと私は思っています。できないことばかりに目を向けるのではなく、障害者の人達ができることや得意なこと、目を向けて接することが「共に生きる社会」を創るために必要だということに、この経験を通じて気づかされました。

それ以降、私は以前よりもたくさん弟に話し掛けるようになりました。なぜそうしたのかはあまり覚えていませんが、たくさん弟の言葉を聞けば、弟が早く話せるようになるかもしれない、と幼いながらに考えた結果だったのではないかと思います。「できることに目を向ける」というのは、いつのまにか自分に対しての言葉にもなっていました。

その半年後、弟は言葉を話すようになり、医師からも、人より少し劣る部分もあるが、障害というレベルではないと言われました。今では、家族全員が困ってしまうほどおしゃべりな性格になり、毎日とても楽しく過ごしています。

「共に生きる社会」を創るためには、まず相手のことを知ることが大切です。そのためには、もつと健常者が障害者と向き合える、障害者の本来の姿を見ることのできる機会が必要だと思います。私は教師になって自分の体験したことを伝え、障害をもつ人と触れ合える機会をたくさんつくりたいと思っています。そして、一人でも多くの教員たちや、「共に生きる社会」について考え、障害をもつ生徒に対して偏見をもたずに接することのできる学校を創るのが私の夢です。次世代を担う子供たちが「共に生きる社会」を意識すれば、今も、そして未来も障害者と健常者がお互いを認め合いながら暮らしていける社会を創れると信じています。